

Wesley Hall News



初等部1年生 なかよしキャンプにて

青山学院スクール・モットー
地の塩、世の光
 The Salt of the Earth, The Light of the World
 (新約聖書 マタイによる福音書 第5章13～16節より)

No. 85

2005. 9. 20.

説教 「本当の平和」

	小澤 淳一 ……	2
●「伝えることの重み」— 中等部 第一回沖縄修学旅行を終えて —	津村 裕子 ……	4
●女子短期大学「キリスト教特別週間」について	伊藤 勝啓 ……	6
●BCJ鈴木雅明氏にインタビュー	伊藤 悟 ……	8
●豊かにまく稔りのために — 新しいウェスレーホールを —	浅田 寛厚 ……	10
●キリスト教図書紹介 三位一体 アウグスティヌス著作集第28巻	清水 正 ……	11
●青山学院資料センター所蔵のキリスト教貴重文献・史料 その12	氣賀 健生 ……	12
●私の教会 日本キリスト教団 新栄教会	島根 照夫 ……	14
●宗教センターだより	……………	15

説教

「本当の平和」

イザヤ書 11章 1～9節



小澤 淳一

初等部宗教主任

イザヤ書 10章 33節から 11章 9節は、旧約聖書の中でも最も有名なメシヤ待望の預言の一つとされています。預言というと何百年も前に預言者がイエス・キリストの出現を直接告げたかのように理解する向きがありますが、そうではありません。預言者はその具体的な状況において深い信仰を通して預言を告げたのです。そして、その預言が決して直接的でないけれども、根本的にはイエス・キリストにおいて実現されたのだというのが新約の信仰です。イザヤがこの預言を語ったときは、南王国ユダの王が、神に従わなかった危機的な時代でありました。イザヤは、全世界のために神に選ばれた民であるのに、神に背いてやまないイスラエルの現状に深い失意と悲しみの心を抱いていました。現実の王に絶望したのです。しかしイザヤは、民に失望しても、神に失望はしていませんでした。全世界のために、イスラエルを選ばれた神の真実に深く信頼し、この世に対する数々の失望と挫折にも関わらず、歴史を支配し、この人類の歴史を導かれる神への信頼を固く守ったのです。そして、現実はどうであれ、神は必ず未来においてそのみ旨を実現される、神は必ずメシヤの王をイスラエルから起こしたもうと確信したのです。

さて、少し前の聖句から味わいたいと思います。10章 33、34節のところには、南王国ユダに対する神の裁きが告げられています。この裁きはイザヤの時代には実現しませんでした。それから 100年後のエレミヤの時代に現

実のものとなったのでした。しかし、裁きは単なる滅びではなく、救いの恵みのためのワンステップだとイザヤは言うのです。神は、恵み救わんがために裁き、人の心を砕きたもうのだというのです。しかし、それは人間の側から見れば、奇跡としか言いようのない出来事だとイザヤは感じていたのです。

「エッサイの株からひとつの芽が萌えいで
その根からひとつの若枝が育ち」(1節)

エッサイとは、ダビデの父です。エッサイとは、田舎の名もない人でした(サムエル上 16: 1-13)。しかし、神はそのような家系からダビデー旧約の理想的な王ーを起こされたのでした。しかし、ダビデの家系の南王国ユダの王たちは、神から離れ、背き、人間的な力に頼り、国は乱れ、破局に臨んでいるのです。イザヤがいくら、いさめても、聴く耳を持ちませんでした。イザヤは、この王たちに深く絶望していました。だから、「ダビデの株から」とは言わずに「エッサイの株から」と言っているのです。それは、そのようなメシヤ王が生じるなら、それは神による奇跡だと考えたからです。

2節「知恵と識別の霊、思慮と勇気の霊、主を知り、畏れ敬う霊。」この王は、知恵と識別の霊を持っています。知恵とは、その時その時の事情に即して、正しく行動なしうる能力です。識別とは、その時々状況をはっきりと見抜き、把握する力のことです。思慮と勇気の霊も同じことです。救い主としての王は、このような能力をもって内政と外交を行うのです。そして、

それは神よりの霊によるのです。なぜなら、彼は主を知り、主を恐れる霊をもっているからです。彼は、主を信頼し、これを畏敬するから、その政治はどうしても次のようになるのです。

第一に、決して、自分の感情や気分や主観によって事をしないということです。全てを客観的な冷静な洞察によってするということです。第二に、貧しい者、弱い者、柔和な者を決して粗末にしないということです。彼らの人権と幸せを第一として、金持ちや権力者の利益を第一としないということです。第三は、悪き者を厳正に裁くということです。この三つが、現実の政治には何と欠けていることでありましょうか。この三つは、現実の政治—特に日本の—に対する辛辣な批判ではないかとも思います。イザヤは、メシヤとしての王を描くと同時に、政治を司るもののあり方を的確に述べているのです。

6節からイザヤはさらに飛躍しているかのように見えます。おおかみと子羊とが共に寝て、おおかみは小羊をいたわり、ひょうも子やぎを可愛がって、これを殺さず、ししもおとなしくなって草を食べ、赤ちゃんが毒蛇にたむわれても害されない、というのです。当時のパレスチナの農村は危険に満ちていました。ライオンやひょうはたくさんパレスチナにいました。おおかみも、熊もいました。そして、子供たちが毒蛇にかまれることも多かったです。彼らは、創世記の記事にあるように、もともとは樂園で人と人、人と獣が仲良く暮らしていると考えていました。それが、人の罪のため、ノアの洪水のあと、獣が他の獣や人を襲うようになったと考えられたのです。そのような考えから、いつの日かすべての人が主を恐れ、それによって人と人との間に深い平和が打ち立てられるとき、それは必然的に人と動物の間、すなわち、自然界にも平和が来ると信じたのです。

これは言うまでもなく、新約のパウロの思いでもありました。ローマ8：18－25には次のようにあります。「現在の苦しきは、将来わたしたちに現されるはずの栄光に比べると、取るに

足りないといわたしは思います。被造物は、神の子たちの現れるのを切に待ち望んでいます。被造物は虚無に服していますが、それは、自分の意志によるものではなく、服従させた方の意志によるものであり、同時に希望も持っています。つまり、被造物も、いつか滅びへの隷属から解放されて、神の子供たちの栄光に輝く自由にあずかれるからです。被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっていることを、わたしたちは知っています。被造物だけでなく、“霊”の初穂をいただいている私たちも、神の子とされること、つまり、体の贖われることを、心の中でうめきながら待ち望んでいます。わたしたちは、このような希望によって救われているのです。見えるものに対する希望は希望ではありません。現に見ているものをだれがなお望むでしょうか。わたしたちは、目に見えないものを望んでいるなら、忍耐して待ち望むのです。」

イザヤの預言は、イザヤが活着している間には、イスラエルの歴史において現実とはなりませんでしたが、しかし、イエス・キリストの弟子たちは、このイザヤの預言は、根本的にはイエス・キリストの復活によって実現し、先取りされたのだと信じたのです。そして、私たちも、それを信じて立っています。もちろん、ここで描かれているようなことは、現実の歴史、自然のなかでは実現していません。現実の世では、罪と死と矛盾が満ちあふれています。しかしキリスト者は、イエス・キリストの十字架と復活によって罪と死の力が打ち破られたことを信じています。そして、世の終わりに信じて希望しているのです。

神が歴史を支配し、そして神と人、人と人、人と自然との和合を実現してくださるのだという確固たる希望こそが、どんなときも楽観主義にも悲観主義にも陥らず、確固として、よりよき社会実現のため努力していく力であると思います。私たちは、来りたもうイエス・キリストに基づいて、未来に深い希望を持って進み行きたいと思います。

「伝えることの重み」

— 中等部、第1回沖縄修学旅行を終えて —

津村 裕子
中等部教諭



「沖縄には行けない。」数年前孫と一緒に家族旅行でもと誘った際、今年74歳になる母はそう答えた。「何もかも全部沖縄に押し付けて、私達は生き残ったように思えて…。」娘時代に母から戦争中の事を話してもらった記憶は余りなく、戦後50年以上たってはまだこんなに強い思いがあった事に少し驚いた。沖縄は母にとって贖罪のされてない場所なのだろうか。母は自分とひめゆり部隊を同年齢として重ねる。

中等部で宿泊行事の見直しがされたのは4～5年前である。杞憂される点はいくつもあったが「義務教育の中で平和を考えさせたい」という総意から沖縄が中学3年生の修学旅行地選ばれ、今年の3年生57期の生徒がその第1期生になった。2年前から私たち担任は準備にかかったが、3泊4日の日程に戦地・基地の島としての沖縄と、沖縄の美しい自然と豊かな文化についての学習を取り入れるのには旅行会社と他校の修学旅行の実践例に習うことが多く、日程はさほど独創的なものではないと思う。ただ「平和学習」を事前学習に裏打ちされたものにしたいと担任たちが思いを強くしたのは、昨年の秋に6人で沖縄に下見に行ってからであろう。

この下見は私にとって非常に印象深いものであった。生徒たちの訪問地を現地のガイドさん兼ドライバーの方にはずっと付いて説明していただいた。聞かなければわからないような、見過ごしてしまうことがたくさんあった。ガイドブックに載っているのはたった1行の説明でも、その場所に立って現地のガイドさんの肉声で語られると重みが違ってくる。「あそこの小高い茂みはガマですよ。その向こうのもそう。手前ので

は集団自決で～人なくなりました。」「あそこに一部はげたような山があるでしょう。米軍の射撃訓練で山火事になり、消火薬をまいたために木が育たないのです。」「ここから見ると深い谷になっているでしょう。左手の海岸は米軍が上陸した所です。日本軍はこの谷を守備線にしていたから、このあたりは住民を巻き込む血で血を洗う激戦地区でした。」「嘉手納基地も普天間基地もここからよくみえるでしょう。広大でしょう。沖縄は基地はいらないのです。でもあれらの土地は田んぼにも畑にもならない。基地にしていれば税金が入るのですよ。沖縄はけっして裕富でないから。」

この下見の直前にクラスの生徒に「なぜ、先生たちは3年生の修学旅行に沖縄を選んだのか分かるか」と問うた。反応は鈍く、応えは返ってこない。「えーっと… 海が綺麗だから?」「楽しそうだよね…」とか細々と声がする。あつけにとられてつい声を荒げた。「そんなことがわからないの? 日本で唯一地上戦が行われた場所じゃない! あなた方に戦争と平和を考えてもらいたいからよ!!」そんなことも知らずに生徒が沖縄に行くことをただ喜んでいるのかと思い、理不尽にも腹がたった。…なぜそんなに知らないのか。…それは、教えられていないからではないか。そんなひどく単純なことに気がついた。誰が教えていないのか。大人が、親が、学校が、教育が、世間一般が、メディアが、空気が「過去の戦争」を教えていないのだ。私たちより上の世代は、親・祖父母が戦争世代であり、戦争というものが生活の空気を通して、少しでも伝えられていたように思うのだ。しかし現在の私を含む親世代は、

子供に「過去の戦争」を伝えているだろうか。そして戦争に続いてアメリカの占領地となり、返還後も基地問題に悩まされ続けている「現在の沖縄」については更に意識が遠いことを認めざるを得ない。

帰りの飛行機で自責の念に駆られた。私はこの10年に今回の下見を除いて3回沖縄を訪問していた。いずれも子供をつれた家族旅行。3回行って沖縄南部の戦跡地を訪れたのは初回にひめゆりの塔のみであった。次からはリゾートに徹した。せっかくの沖縄。非日常性を求める旅行に戦跡地の訪問は必要性を欠き、1回南部を一回りしたことで何となく義務を果たしたような気になっていた。自分の意識の低さが恥ずかしかった。12年前、3歳であった長男の記憶にひめゆりの塔は残ってはいない。今彼は中学3年生、今年沖縄へ修学旅行にいった生徒と同じ学年である。私は親として子供に戦争を伝えていない。

昨年度、中等部では2年生の後半から、多くの教科の協力、HRの時間を利用したビデオ鑑賞、春休みの宿題等で事前学習を積み重ね、マリンスポーツや観光の楽しみも心待ちにし、5月31日に羽田を出発した。平和学習として、沖縄の南部を中心に平和祈念資料館、ひめゆりの塔、糸数壕、嘉手納基地の見える安保の丘を訪れた。「ひめゆりの塔」で千羽鶴を捧げ、多くの生徒がひめゆりの分室に置かれている手記を積極的に読んでいた。事前に「ひめゆりの塔」の映画の鑑賞、社会の授業等で下知識はあったと思う。また学徒隊が自分たちと同世代であることもあるのだろう。戦争の中に逝った若い魂を思い描いていたと感じた。割り当てられた時間が短すぎるというように、生徒たちは集合のバスに走って戻った。

「糸数壕」について、私たちが作製した「沖縄学習ノート」より紹介文を引用する。

糸数壕(アブチラガマ) 戦争中は野戦病院、避難壕、要塞などとして使われた。今、懐中電灯を頼りに入れば、ちょっとした探検気分を味わえるが、当時、沖縄の人々がこのガマの中、ゴツゴツした地面、天井から絶えずポタポタ落ちるしずくの下、敵

にみつかる恐怖と、高い湿度、遺体、病人、怪我人とそのうめき声、汚物と腐敗臭の暗黒に、息をひそめ耐えたことを思いおこさなければいけない。

1クラスずつ専門のガイドさんについて約30分の行程でガマ(=壕)に入る。ガイドさんは生徒たちに簡単な質問をしながら日本の軍隊は日本の国民を守ってくれなかったことを語る。口調は淡々とし言葉の少ない静かな説明である。ガマの中央で全員の懐中電灯を消し漆黒の闇の中で黙祷を捧げる。経験のない漆黒の闇と、「この中で死という恐怖と隣りあわせだった。これが戦争なのだ」というガイドさんの言葉はきっと彼らの心に刻まれたであろう。ガマをでた時、誰の指示もなくクラス全員が「ありがとうございました」と頭を下げお礼をのべた。この旅行の中で最も私が嬉しく思ったことである。

「安保の丘」では眼前に嘉手納基地とその滑走路が広々と広がる。その脇に狭苦しうに連なる嘉手納町とは対照的である。一言添えると生徒たちは「本当だ」と気がつく。戦闘機が次々と着陸し、さらにその数分後今度は次々と編隊を組んで離陸していった。それまで写真を取り合ったり喋ったりしていた生徒たちが沈黙してその様子に見入り、その爆音に驚愕する。移動のバスに乗り込む時、ある男子生徒が「僕の小学校は(厚木)基地の騒音で夏でも窓を閉めていた」とポツンと語ってくれた。

第1回目の沖縄旅行が成功したかを私たちは、「生徒にどの位伝わったか」ということで考える。生徒たちの沖縄での様子、直後のアンケート、生徒たちの「沖縄学習ノート」をみるかぎり、手探りで始めたこの「平和を考える」修学旅行は成功だったと思っている。

戦後60年に当たる今年、取り分けこの夏は「平和と戦争」に触れて考えてみたい。沖縄の終戦、広島・長崎の原爆投下、そして8月15日。まず「知ること」が多くの行動の原点となろう。私はこの夏、両親・中3の長男・小4の次男を連れて再び沖縄に行く。私が娘として、親としてできる「伝える事」の一つとなるのを期待したい。

女子短期大学 キリスト教特別週間について



伊藤 勝啓

短大宗教主任

今年度、女子短期大学では「ともに生きる」という年間主題のもと、様々な活動を行っています。特に、5月最後の1週間を「キリスト教特別週間」とし、例年行ってきた宗教講演とチャペル・コンサートを軸に、下記のようなプログラムを展開しました。

■ 5月23日（月）13:10～14:00

「John Wesley 自伝」鑑賞会

お昼休みに行われている礼拝に続いて計画しましたが、授業時間と重なっていたため、残念ながら参加者はありませんでした。

■ 5月24日（火）12:30～13:00

「英語で賛美歌を歌おう！」

5月24日は、青山学院がその伝統に連なっているメソジスト教会の祖、ジョン・ウェスレーの回心記念日であることを覚えて、彼の弟、チャールズ・ウェスレー作曲の膨大な数の讃美歌より、数曲を宣教師口パート・タヒューン先生に選んでいただきました。当日は、先生のリードのもと、火曜日昼休みに定例で活動している

English Bible Club やゴスペルグループのメンバーも合流し、英語と日本語の両方で、お昼のひととき賛美の声を礼拝堂に響かせました。このような機会があれば、また参加したいとの声もありました。

■ 5月25日（水）12:30～13:20（3限短縮）
宗教講演「私がアメリカで考えたことーキリスト教徒とユダヤ教徒とイスラム教徒は共存できるか」

宣教師として、青山学院で短大宗教主任、学院・大学宗教部長としてお働き下さった鈴木有郷先生は、日本での任務を終え、現在はアメリカに戻っていますが、今回、研究のため日本にいらっしゃることを聞きおよび、この機会を得られたことは喜びに堪えません。

さて、講演テーマに対する先生の答えは、明快に「できる」でした。当日配布されたレジュメから、お話の概要を辿っていくと、「異なる人種、宗教、文化を背景にもつ人々がいかにして一つの国家を形成していくことができるか、という課題を建国以来抱えてきたアメリカ合衆国において、特に9.11以降、キリスト教徒とユダヤ教徒とイスラム教徒が共存できるかに、その問いが集約されてきている。これら3つの宗教はいわば親戚同士の宗教であるが、不幸な歴史をつくってきた。21世紀、この歴史をのりこえるために不可欠なのは、宗教間の相互信頼に基づいた寛容の精神であり、その寛容は、自らの信仰を薄めて相手に擦り寄ることや、相手の立場に対する無関心から来るものでもなく、自らの信仰に明確に立ちつつ、異なる信仰や宗教的伝統に対して心を開き、尊敬の念を



もって接することなのである。」と述べられ、その具体的実践例を3つ挙げてくださいました。そして、この3例を通して「アメリカ社会全体が他宗教に猜疑の目を向けている中、他者の痛みを自分の痛みとして感じ、その痛みを少しでも和らげようと相手に近づいていく感性と想像力の大切さはいくら強調してもしすぎることはない。自己のアイデンティティーを維持しながら、自分と



異なる他者に対する共感と連帯の道を切り開いていくアメリカ独自の実験的試みに学ぶところが大きい」と結ばれました。今、現実の世界を取り巻いている問題を取りあげ、それらが自分とはかけ離れた遠い世界の出来事ではなく、まさに自分の周りのことなのだと言及された先生のお話に、若い魂が揺さぶられたように感じました。講演後も、授業のなかった学生が多数残り、先生を囲んで3つの宗教の関係性や、「ともに生きる」という今年度の宗教活動のテーマについて、様々な角度から話が交わされ、有意義なひとときを過ごせたことも感謝でした。

■5月26日(木) 12:30～13:20 (3限短縮)
前期チャペル・コンサート

日本を代表するオルガニストの一人、酒井多賀志氏をお招きし、ブクステフーテ「前奏曲、フーガとシャコンヌ 八長調」、バッハ「前奏曲とフーガ イ短調」などバロック時代の代表的な曲から、ご自身の作曲による「フーガ ニ短調」、有名な讃美歌のひとつ Amazing Grace を主題にした「変奏曲とフーガ Op.42」など多彩な演奏を、曲間に一つ一つ丁寧な説明をはさみながら、聴かせて頂きました。圧巻は今回の演奏会の中心、奄美島唄とパイプオルガンとの「共演」でした。残念ながら奄美島唄のうたい手の方においでいただくことは叶いませんでしたが、「綾蝶節とオルガンのアンサンブル」という曲は非常に興味深いものでした。西洋の教会文化の中で生まれたオルガンという楽器と、奄美という地方の風土の中で培われた島唄は、明らかに異質な音楽であるはずなのですが、礼拝堂の中に響いた音は、ひとつのハーモニー

を奏でていたのです。お互いに歩みよることではなく、それぞれのもつ世界を保ち、相手の音楽の特徴を認めて合わせたときに生み出された新たな音楽を、実体験した時でした。「ともに生きる」というテーマが、前日の宗教講演での言葉に続き、この日は音楽という別の形で示され、さらに理解が深まり豊かな意味をもったものとなりました。

■5月27日(金) 12:30～13:00

讃美歌礼拝

本学の兼任講師(キリスト教学)である菊地純子氏により、「十戒」「主の祈り」を中心とした奨励をいただき、聖歌隊のリードのもと、カルヴァンによる「十戒」、ルターによる「主の祈り」の讃美歌を共に歌いました。学生たちの礼拝レポートの中には「感動！」という評もありました。なお、菊地先生は旧約聖書学の専門家、楔形文字を読みうる数少ない学者の一人でもあられます。

学生のほとんどが本学に入学して初めてキリスト教に触れます。2年間という短い時ですが、キリスト教活動と出会い、そこでの交わりを通して、より豊かな学生生活をおくってほしいと願い、今年度はいくつかの工夫を凝らしています。そのうちのひとつが今回ご報告した「キリスト教特別週間」です。学生の主体性が活かせるよう留意しつつ、「ともに生きる」という主題をそれぞれの課題として捉え、その中で、一人一人の学生に神さまとの出会いが与えられるよう祈りながら、これからの活動も進めていきたいと思います。

BCJ 鈴木雅明氏にインタビュー

編集：伊藤 悟

去る6月17日(金)、大学の青山スタンダード、キリスト教理解関連科目の特別講座として、バツハ・コレギウム・ジャパンによるレクチャー・コンサート「教会カンタータの夕べ」が開催されました。世界的にも知られるバツハ・コレギウム・ジャパンの演奏、そしてこれを率いる鈴木雅明先生のレクチャーに、会場は大いに魅了させられました。今回は、リハーサルの合間を縫って、鈴木先生に本誌のためにインタビューをお願いしました。

(インタビュアーは嶋田順好大学宗教主任)



鈴木 雅明氏

バツハ・コレギウム・ジャパン音楽監督
チェンバロ・オルガン奏者

嶋田 いまの東京恩寵教会に行かれるようになったきっかけは？

鈴木 僕は日本キリスト教団にずっといて、学生時代は高井戸教会に通っていたのです。ところが妻が改革派の東京恩寵教会の会員で、結婚までは高井戸教会に通っていたのですが、そのあと東京恩寵教会に移ったのです。妻のほうに引っ張られたというわけです。しかし、本当に不思議なことですけど、そのあと1年でオランダに留学することになりました。

嶋田 改革派の本場ですね。

鈴木 そうなんです。じつは僕はただ音楽的な理由でオランダに行ったのですが、行ってみたら自分が移ったところの改革派というのが、じつはオランダが本拠地だったということを知って、非常に摂理的なものを感じましたね。

嶋田 教会音楽との出会いは・・・？

鈴木 教会では中学のときから6年間ほとんど毎週奏楽をしていました。リードオルガンでしたけれど・・・。そのうちリードオルガンというのはオルガンの代用品だということに気が付いたんです。そしてそのころに、たとえばバツハの音楽にもたくさん出会ったし、オルガン音楽だけじゃなくて、口短調ミサとかマタイ受難曲とか、有名な合唱曲などに触れる機会もあって、それが結局、そのあと大学で教会音楽をやることにつながったのです。

嶋田 『バツハからの贈り物』という本を読んで一貫していると思えるのは、バツハというのが、じつに自分というものを客体化して、自分の超えたものに目を向けて信仰の深みを経験していくのですが、今の若者は、そういう意味では主観的というか、ロマンティックなものというか、イエスをあたかも恋人のような感覚で捉えていて、神の超越性の前にひれ伏すというか、畏れを抱くとか、そういう契機がないように感じる

ことが多いのですが、その辺のことを先生はなにか感じておられますか？

鈴木 少なくともキリスト教のような宗教に、そもそも若者が興味を持つということが非常に少ないですね。宗教についての問題は表面化しないというか、みんなの中には必ずや目に見えないものとか、そういう自分自身を制御しきれない面を必ずもっていて、そのあたりを悩んでいる学生っていうのは、実はものすごくたくさんいて、現実には彼らは何の回答も得られないままいることを、僕は日々目のあたりにしています。だからこそ、キリスト教学校のようなところで、キリスト教的な観点からさまざまなアドバイスができるというのは、ひとつの大きな強みだと思います。

嶋田 先生は御著書のなかで、バツハはとつときにくいと述べておられますが、学生がバツハに触れていく場合に、何らかの筋道のようなものがあるのでしょうか。

鈴木 確かにバツハの場合は、人によってどういう糸口が一番いいかというのは、まちまちです。よく言われるように、盲人が象を触ったらどんなイメージを持つかっていう話がありますが、それと同じように、バツハというのはあまりにも巨大すぎて、全貌をつかむということは難しいと思います。ですから、たとえば、非常に理屈っぽい人は、ドイツ語の歌詞はこのようになっていて、それが音楽にどのように移されているかというような、そういう知的な探究心ということで入ってくる人もいますし、それからただBGM的に聴いて心地よいという人もまたいます。ただ僕が一番残念に思うのは、子どものときにピアノの先生にバツハを習わされて、そこでバツハを非常に難しいものだと思って敬

鈴木雅明氏 Profile *バッハ・コレギウム・ジャパン音楽監督、チェンバロ・オルガン奏者*

神戸出身。12歳から教会のオルガニストを務める。東京芸術大学大学院修了の後、アムステルダムのスウェーリンク音楽院卒業。1990年からはオリジナル楽器アンサンブルと合唱団《バッハ・コレギウム・ジャパン》(BCJ)を結成、J. S. バッハの宗教音楽作品を中心に幅広い活動を行っている。デュイスブルク音楽大学(ドイツ)講師、神戸松蔭女子学院大学助教授を経て、1990年3月からは東京芸術大学でオルガンとチェンバロの指導にあっている。現在、東京芸術大学教授、日本キリスト改革派東京恩寵教会オルガニスト。

遠してしまうという人が少なくありません。そういうことを乗り越えてさえいれば、どういう観点からでも入れると思います。

嶋田 バッハの世界はルター派的だと思うのですが、先生が改革派でありつつバツハに取り組むとき、先生ご自身の中ではいったいどのようなことが起こっているのでしょうか。

鈴木 僕自身がなぜか改革派にいるというのは非常に不思議でもあるし、しかし同時に、僕は非常に大きな恵みだと思っています。それはどういうことかということ、バツハのカンタータというのは、ルター派の中でも非常に強い社会性と時代性に縛られています。今の時代のルター派の礼拝の中で、その当時とそっくり同じことができるかということそんなことは絶対にできない。でも、それにもかかわらず、バツハの音楽というのは、ある意味での時代や社会を超えたメッセージをもっている。そのメッセージを、どうやってわれわれが今評価するかという問題ですね。たとえば僕は、バツハのカンタータを演奏するとき、まず音楽家としてのプロフェッショナルな視点を通してでないと、そこに描かれていることをどのように表現するかという、正しいテキストの実現というのはできないと思っています。つまり音楽の実現を通してはじめて、そこに含まれているメッセージが聴衆に伝わるからです。そして、あらゆる歴史的社会的制約を超えて、音楽そのものをまず神の創造物として評価でき、かつそこに表現された言葉を、神のメッセージとして重視しようとする改革派的な立場にいられるのは、僕の中から見ると非常に理想的だなと思っています。

嶋田 大学における文化の発信ということについて、鈴木先生から青山学院へなにか提言などがあるのでしょうか？

鈴木 青山学院のようなところで今回のような企画をしてくださるのは、わたしたちの立場からすると本当に素晴らしいと思います。それは単に学生や教職員へのメッセージというだけではなく、われわれ演奏者にとっても、この曲にはこういうキリスト教のメッセージが含まれ

ているんだ、そういう音楽をわれわれがやっているんだということをごいう機会に再確認させていただくことができます。そういう意味で、キリスト教学校の文化的責任は非常に大きなものがあると思います。僕は教会も現代社会とのつながりのなかで文化的な責任をきちんと果たすべきだと思つねづね思っているのですが、それはなかなか難しい状況です。たとえば経済的な力も必要だし、人的な力も必要だし、教会だけではとうてい日本の場合は難しいのです。だからこそキリスト教学校は日本社会にとって大きな存在だと思います。

嶋田 先生は、バツハを理解するにはキリスト教の知識ではなくて信仰だ、と明瞭におっしゃいますね。

鈴木 僕の立場から言うと、信仰を持たない人がどうやってバツハを聴いているかは、実のところわからないのです。バツハであれモーツァルトであれ、音楽を理解したり楽しんだりすることと自分が信仰を持っているということとは、まったく次元の違うことです。けれども、結果として一歩引いて、自分のやったことや今日の演奏会などを評価しようと思ったときに、結局歌手の人たちや、楽器の人たちが、たとえ技術的に完璧であったとしても、それだけで必ずしもいい結果を生んでいないということ、われわれはこの15年間の記憶の中で反芻しているわけです。とくに日本では、「信仰」ということをわざわざ言わなければ、ベートーヴェンのシンフォニーもバツハのカンタータも同列に論じてまったく恥じるところがない。そもそも目的が違うということ、ヨーロッパの音楽家であればもう当然のこととして知っているのに、日本人にはそこをはっきり言わないとわからないのです。だから、そういう意味で、僕は、バツハはやはり信仰がないとわかりませんよ、とわざと言うのです。

嶋田 すばらしいお話をうかがうことができました。貴重なお時間を割いていただきありがとうございました。

豊かにまく稔りのために —新しいウェスレーホールを—

浅田 寛厚

大学名誉教授



いま青山キャンパス東門の手前左側、新しく建設された大学16号館の陰に、ひっそりと建っている3階建ての旧宗教センター「ウェスレーホール」は、1968年の9月30日に完成し、同じ年の11月16日、創立94周年の記念日に献堂式が行われました。総工費は約8,300万円で、経費の約半分は、米国のメソジスト教会本部と全米各地のメソジスト教会の青山学院に好意をもつ教会員の浄財によってまかなわれたといわれています。

実際に完成したのは創立94周年の年になってしまいましたが、学院全体の宗教活動センターとしてのウェスレーホールの建設は、創立90周年の記念事業の一環として計画されたもので、完成後の使用規則の第一条(目的)には以下のように、記されています——

青山学院宗教センター・ウェスレーホールは、建学の精神に基づき、本学院全体の人格教育の中核であるキリスト教教育の徹底をはかり、学院における宣教の使命を達成するための活動を推進し、これに必要な研究を行うことを目的とする施設である。

現在もこの目的は変わりませんが、大きく変わったと思われるものは、この目的を達成するための背景です。当時はウェスレーホールに与えられた目的を実現するものとして、学院総合宗教委員会がありました。院長を委員長として、

常務委員・各部の宗教主任・宣教師・神学科専任教員・大学と女子短期大学の事務部長・高中初等部の教頭・幼稚園の主事・各部の宗教委員・宗教主事などで構成されていましたが、上記委員のうち、常務委員は、大学・女子短期大学の学長・高中初等部の各部長がその任にあたっていましたから、たんに宗教関係者ばかりでなく、学院全体の教職員の管理者をふくめた一大連合体がウェスレーホールの宗教活動全体を支えていたこととなります。

この「一大連合体」というのは、けっして誇張ではありません。献堂式の式辞のなかで当時の院長ご自身が「全学を挙げての一大連合体として宗教活動を積極的にすすめるため…」と、ウェスレーホール建設の目的を強調するくだりで使われている言葉で、建学の精神のもとでの学院のアイデンティティーを確立するためのなみなみならぬ決意のほどをうかがい知ることができません。

青山キャンパスの正門を入った右手にジョン・ウェスレーの銅像が立つ青山学院は、昨年、創立130周年を迎え、数々の記念行事が行われましたが、米国格付会社の「AAマイナス/安定的」に続いて、今年も日本格付研究所から「AAプラス」の評価を受け、大変よろこばしい発展をとげております。大学は立派なガウチャー記念礼拝堂を与えられ、宗教センターの事務局がある間島記念館は、青山キャンパス再開の建築計画のなかに取り込まれると聞いております。

旧宗教センターのウェスレーホールは建物の標示だけを残して大学の他の用途に転用され、事務局だけが大学の間島記念館に仮住まいをした形の宗教センターがどうなるのか、1993年から10年以上も不自然な状態が続いているだけに、とても気になるところです。

献堂式の式辞で院長が引用されたコリントの信徒への手紙二、9章6～8節を覚えて、「豊かにまく稔り」として、学院全体の中心的存在としての新しいウェスレーホールが与えられますよう心から祈っております。

『三位一体』

アウグスティヌス著作集第28巻、教文館、2004年

清水 正

高等部宗教主任

近年、キリスト教の古典的著作が日本語で刊行されるようになった。日本のキリスト教会の思想的成熟を示すものであろう。古代教会の最大の教父と目されるアウグスティヌスの神学的代表作『三位一体』が昨年3月、教文館から出版された。アウグスティヌスと言えば『告白録』が有名であり、また代表作として『神の国』が既に知られている。しかし、『三位一体』は彼の神学的思索を代表するものである。

本書を読んで分かることは、教父たちにとって神学は聖書テキストに基づく思索であるということである。近代的な歴史批判的方法がまだ確立されていない時代だからこそ、聖書そのものに即した神学的思索が真摯になされたと言えるかも知れない。これはわれわれも大いに学ぶべきところである。正しい神学は聖書に拘束された信仰的思索である。聖書の拘束性とは、聖書証言を神の啓示的出来事の証言として厳密に理解する態度を意味する。勝手な解釈や読み込みを排して、ひたすら聖書テキストの証言に聞き入り思索することが、神学的実りをもたらすのである。教父の著作はそのような原点にわれわれを導き返すのである。

アウグスティヌスは本論5巻8章で、三位一体の三位について注目に値する発言をする。「三位」は3つのペルソナと言われた。「実体」と言わず「位格」という語を用いた。この語により事柄が説明されたとは言えないが、神の神秘に関して沈黙しないためにあえて三位（3つのペルソナ）と言うのである。神の神秘は「三位一体の神」と言うこと

によって神秘として確認される。これが三位一体論の意味である。さらに8巻8章で、彼は「神は愛である」という聖書の根本命題と三位一体の関連を明らかにする。彼は言う。「君は愛を見るならば、君は三位一体を見るのである。」つまり愛の神が三位一体の神である。「神は愛である」ことの論理的表現が三位一体論として展開されるのである。

アウグスティヌスは500ページ以上にわたって詳細に論じてから、次のように言う。「けれども、これまで多くのことを述べてきたにもかかわらず、あの言説を絶する至高の三位一体にふさわしいことを、私は何一つ述べなかつたと、あえて表明しよう。」そして彼は本書を祈りをもって終える。

「一なる神にいます主よ、三位一体なる神よ、この書物の中であなたのことについて私が語ったすべてを、あなたに属する者が認めてくれるように。」



氣賀 健生

大学名誉教授

今回は、まず“超”貴重史料として『改訳新約聖書稿本』10冊を御紹介しましょう。この“稿本”は文字通り翻訳原稿の草稿で、勿論我が資料センター所蔵の稿本が唯一の原本です。明治時代の後期になって、日本での聖書学の進展と、国語の変遷のため、当時の福音同盟会^(注)に於て改訳事業が提起されました。1910（明治43）年、日米4人ずつ、8人の学者（D. C. Green＝委員長・H. J. Foss・C. K. Harrington・C. Davison・別所梅之助・川添萬壽得・藤井寅一・松山高吉）からなる聖書改訳委員会が発足します。ギリシア語原典からの本格的改訳事業は、7年の歳月を費やして1917（大正6）年に完成、横浜の米国聖書会社によって刊行されました。当センターの稿本はその『文語改訳新約聖書』の草稿原本ということですが。

マタイ・マコ（マルコ）・ルカ・ヨハネ各福音書、使徒行伝、ロマ書からガラテヤ書、エペソ書からピレモン書、ヘブル書からヨハネ黙示録の完成原稿計8冊及びマタイ伝と使徒行伝の不完全原稿2冊、の合計10冊が、貴重資料用の桐箱に収められて百年近くも保管されてきました。いずれも和綴、ペン書きで、朱筆訂正加筆が随処に見られ、改訳委員の方がたの翻訳作業の苦闘を彷彿とさせる史料です。「聖書改訳委員会」の専用原稿用紙が使用され、長期にわたる大事業であったことを想起させます。

桐箱には、草稿原本の他に、委員会記録2冊、委員会会計報告書（和文・英文）、翻訳作業中の委員達の写真一葉、「マコ伝試刷」1冊が収められています。この試刷本の表紙及び奥附によってみますと、明治四十四年改訳（委員会記録によれば、マルコ伝から翻訳作業が始められたと思われる）、英米蘇聖書会社発行、発行人ヘンリー・ルーミス、改訳委員代表別所梅之助となっていて、本多庸一（福音同盟会会長）、星野光多（横浜バンドの一人）による序文が附せられています。

委員会記録は、明治43年3月12日から大正6

年2月24日まで7年間に亘って、委員会での議題、作業内容、毎回の出席者その他が克明に記されていますが、これによってみると夏休も殆どなく、通年に亘って日曜日を除く殆ど連日作業が行われていたという、驚くばかりの刻苦勉強ぶりがかがわれます。この“超”貴重史料は、同委員会の書記をつとめた青山学院の別所梅之助教授によって、一括寄贈されたもので、聖書翻訳にかかわる先人達の労苦の一端を如実に物語るものといえましょう。

次に、珍しい聖書をひとつ紹介します。東京のBritish and Foreign Bible Society発行の「アイヌ語聖書」です。筆者はアイヌ語を全く解しませんが、本学図書館にアイヌ語辞典がありましたので、それによってアイヌ語の俄か勉強をした結果、これが間違いなく、アイヌ語聖書であることを確認致しました。当センターが所蔵するのは、John Batchelor訳の聖書3点です。Batchelorはその一生をアイヌ伝道に捧げたイギリス教会宣教会CMSの宣教師です。まずマタイ福音書（A Matteu Orowa No Asange Pirika Orushpe, 1889年）、マタイ・マルコ福音書（Mattaios Newa Markos Orowa No Asange Pirika Shongo, 1896年）、そしてギリシア語原文からの訳文で新約聖書全文（Chikoro Utarapa Ne Yesu Kiristo Ashiri Aeuitaknu Oma Kambi, 1897年）の3冊です。

次に、聖書及び聖書解説関係の貴重書を数点。まずHerbert George Brand訳『新約聖書羅馬書（新訳）』。ブランドは1888（明治21）年単身来日して伝道を始め、30余年日本と朝鮮で伝道しましたが、その間教会組織を設けず、会堂や学校も建てなかった、という変り種の宣教師でした。次は『羅馬書・新約聖書私訳』明治40年、警醒社発行。ギリシア語原典より宮崎八百吉訳。解説文とも85ページ。また、同じくギリシア

語原文より、左近義弼訳『マタイの伝へし福音書』明治40年、博文館発行。左近義弼は青山学院神学部教授として旧約学を担当した“名物教授”でした。この本も詳細な注釈ともに320ページ。なお当センターの蔵書には見開きに「中学部教員室備付」というゴム印が押してあります。

『最古の手がみ・帖撒羅尼迦(テサロニケ)前後書』は、全文候文訳です。平田八郎訳、教文館発行、明治31年。なお巻末にはM. L. Gordonの「本書を読む人に告ぐ」という解説がついています。ゴードンは明治期に同志社で教えたアメリカンボードの宣教師です。

次に天主公教会(カトリック教会)発行の聖書を紹介します。東京大司教伯多祿瑪利亞出版認可、耶蘇基利士督降生一千八百九十五年~九十七年、『聖福音書』上、下です。上巻はマテオ著^{マテオ}耶蘇基利士督^{イエス キリスト}聖福音書と、馬爾谷著^{マルコ}耶蘇基利士督^{イエス キリスト}聖福音書です。下巻は路加著^{ルカ}耶蘇基利士督^{イエス キリスト}聖福音書と、約翰著^{ヨハネ}耶蘇基利士督^{イエス キリスト}聖福音書です。訳者は高橋五郎。高橋五郎は明治初期から中期にかけてキリスト教界に活躍した評論家で、旧新約聖書の訳業、ことに上記の福音書の訳業はカトリック最初の福音書として注目されました。高橋はまた、井上哲次郎の「教育と宗教の衝突」事件でも、キリスト教側論陣の急先鋒として活躍し、「偽哲学者の大僻論」によって、井上に「休戦」を求めさせた人物です。

次に、恐らくは日本で最も古いと思われる聖書解説をひとつ紹介します。1880(明治13)年~1883(明治16)年のあいだに出版された『舊新両約聖書傳』で、当資料センターに所蔵されているのは、その中「新約全」と、「其二分新約書傳(耶蘇基利士督傳記、耶蘇基利士督御誕生並に御幼稚の時の事)(第三過越の祝日)(耶蘇光榮被の事)」の四冊です。何しろ文体が古く到底スラスラ読めませんが、しかしよく読んでみるとなかなか味わいがある興味をそそられます。

次に、明治23年美以出版会社刊『訓蒙図解聖經略史全』を紹介しましょう。この本はアメリカで出版された“The Children’s Bible Picture Book”の日本語訳(田村武治訳)で、本多庸一、小方仙之助その他の序や跋が附され、「日本メソヂスト富山共励会」の印と「御大典記念昭和文庫」の押印があります。開巻第一ページには「第一図・人間の先祖^{アダム イヴ エデン}夏娃^{ソノ}埃田の樂園に在る事」として、アダムとイヴが戯れている図があり、ページをめくるとAdam and Eve driven out of Paradiseという絵が出て来ます。進んで「耶蘇十字架に釘られ給ふ図」まで全部で32の図解があり、最後は「保羅^{パウロ}米利太島^{マリタ}にて行し神跡の事」という不思議な絵で終わっていて、「此書や文章簡易にして解り易く……」と金森通倫の跋がついています。

最後に田嶋象二訳評『新約全書評駁』上、中、下を紹介しておきます。これは文字通りキリスト教及び聖書に対する攻撃反駁の文書です。「神武天皇即位紀元二千五百三十五年、明治八年六月、武州東京任天書院蔵版」とあって、憂異端、非吾黨、荒唐、耶蘇無倫之教、或時大笑、といった文字が次々と出て来ます。さらに「耶教ノ^{キミナキチナキ}無君無父ノ教ヲ見ルニ至テハ^{イヌ}狗ノ猿ニ於ルカ如シ……耶教ハ一神ヲ奉メ他神ヲ^{ハイシシリツケ}癩斥スルトナレハ天祖以下歴代ノ^{テンシ}聖帝賢佐忠臣烈士ノ^{ヤシロ}廟社悉ク^{コホヤヤフル}毀破ヒザルヲ得ス」といった調子で全巻一貫しています。まあ何となく品がないですね。明治初年頃のキリスト教攻撃のひとつの典型と思われます。

(注) 福音同盟会は明治初年につくられたプロテスタント各派の協力機関。1885年第4会基督教信徒大親睦会で福音同盟会となる。1901年海老名・植村神学論争を機に一旦解散。1911年日本基督教会同盟として再組織された。のち日本基督教連盟へと発展。

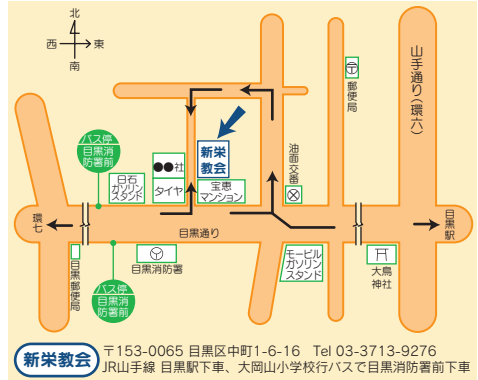
日本キリスト教団 しん さかえ 新栄教会

島根 照夫
初等部教諭

私の通っている教会は、今年9月18日の聖日礼拝をもって132年の恵みに与かります。1873年(明治6年)9月20日、新栄教会は当時の京橋区鉄砲州新栄町六番館で最初の礼拝がおこなわれました。主任牧師は米国王老教会デビット・タムソン宣教師でした。日本でのプロテスタント教会の中で二番目、東京では最初の教会となりました。会員は東京在住の横浜公会員とタムソンから受洗した日本人の会員男5人、女3人の計8人です。ここまで書いてくると、青山学院の源流であるスクーンメーカー先生の始めた「女子小学校」に似ていますね。青山学院の歴史より1年早く礼拝が守られるようになったのです。

先日、アライアンス教団の田村牧師と懇談の機会を持ちました。その時先生は、「よく130年からの光を絶やさずに点し続けていますね。これだけの歴史のある教会です。ぜひ先達の信仰の光を絶やさないように努めてください」と言われ、身体の中に電流が走る思いがしました。聖餐式の形も、創立当時のままのやりかたで行っています。もちろん聖餐式に使う銀製の道具も当時の物です。

私と聖書との出会いは、1969年4月に始まります。その聖書には、「青山学院初等部就職記念、初等部長佐藤信」と記されています。ある時、その大切な聖書をなくしてしまいま



した。職業柄あちこちを旅する機会が多く、どこかに忘れてきたのでしょうか。気にして家中を探したり、同じ場所を訪ねた際



も念入りに探してみましたが、見つからなかったので新しい聖書を買いました。それと同時に、教会へも通ってみたくなりました。家の近くの教会を数軒回ってみました。なかなかぴんときません。その中で新栄教会が私の目にとまったのです。何回か通り過ぎては戻り、行きつ帰りつしているうちに「この教会にお入りなさい」と呼びかけられているように感じたのです。

教会に通い始めて2年目の夏、軽井沢で合宿していたときに、何気なく部屋の隅の本棚の前を通りかかったとき、その中の本の一冊が何か語りかけているように気になったのです。それはまるで、暗闇に光る螢の火のごとく光を放っていました。紛れもなく私があればほどまでに探し回っていたあの聖書だったのです。神様は人間に色々投げかけていますが凡人にはなかなか気がつかないことがあります。凡人の私が神様と向かい合ったとき、私は神様のなせる業に気づいたのです。神様のなせる業に気がつくように、また心を神様に向けられるように今後も努力したいと考えています。

宗教センターだより

幼稚園 より

2学期には様々な行事を経験し、神様からの恵みをたくさん感じながら過ごします。

軽井沢キャンプ(年長組)

9月6日(火)～8日(木)

子どもたちが自然の中で過ごす3日間です。

子どもフェスタ

10月8日(土)

保護者会主催の、子どもたちの為のお祭りです。子どもたちも手作りクッキーを販売し、収益はチャイルド・ファンド・ジャパンに捧げられます。

収穫感謝祭

11月18日(金)

与えられた恵みに感謝する礼拝を守り、収穫物を学院内で日頃お世話になっている方々に届け、収穫の喜びを分かち合います。

アドヴェント礼拝

11月25日(金)、12月2日(金)、9日(金)

クリスマスを迎える準備をしていくときです。

クリスマス礼拝

12月15日(木)

聖誕劇を中心とした礼拝を守り、保護者の方々もともにイエス様の誕生をお祝いします。

(教諭 生沼 晴美)

初等部 より

初等部の新校舎建築も順調に進み、高学年棟もその形が見えてきました。来年2月末には完成です。

この2学期は、まだまだ暑い季節から、オーバーコートを羽織る季節まで、長いですが、神さまの導きの中で過ごすことができるように、祈っています。

召天者記念礼拝

6月21日(火)

40年ほど前に初等部在学中に亡くなられた方の追悼礼拝から始まった礼拝で、現在では初等部に奉職されていた教職員で天に召された方々も覚えて礼拝を守っています。説教者は、元初等部長伊藤朗先生。

教職員退修会

8月30日(火)～31日(水)

「静聴と傾聴」というテーマで、東山荘にて行われました。講師に棚村恵子先生をお迎えし、ドーラ・

E・スクーンメーカー女史について学びました。
(宗教主任 小澤 淳一)

中等部 より

伝道週間礼拝

6月6日(月)～10日(金)の伝道週間礼拝に日本バプテスト連盟渋谷バプテスト教会の渡辺聡牧師をお招きしました。先生は西南学院大学神学部、さらにサザンバプテスト神学校博士課程で宗教社会学を学ばれました。単刀直入で中学生に分かりやすいお話をしてくださいました。

緑蔭キャンプ

7月21日(木)～23日(土)

今夏も高等部の追分寮で、聖書の学びと交わりの時をもつ予定です。飯盒炊さん、キャンプファイアー、ナイトハイク、ショー記念館訪問など盛りだくさんのプログラムも用意されています。

高中合同研修会修養会

9月1日(木)

講師はカトリック・イエズス会ヨゼフ・ピタウ大司教です。

(宗教主任 西田恵一郎)

高等部 より

イースター礼拝

4月12日(火)

イースター礼拝が高等部卒業生の榎本讓先生(筑波バプテスト教会牧師、説教題「神はよみがえらせた」)をお招きして行われました。

特別礼拝

5月11日(水)

音楽伝道者、大和田広美さんをお迎えし、「You are precious!」という宣教題で賛美とメッセージをいただき、一同感銘を受けました。

教職員聖書講座

6月15日(水)

棚村恵子先生(女子短大講師)をお招きし、学院創設者E・スクーンメーカーについて教職員一同深く学ぶことができました。

伝道週間

6月21日(火)、23日(木)、24日(金)

伝道週間の礼拝が、富士見町教会牧師倉橋康夫先生をお招きして行われました。この週は月曜から

宗教センターだより

金曜まで有志の生徒諸君を対象にした Morning Bible Hour が始業前に行われました。

保護者聖書の集い

保護者聖書の集いが毎月第四月曜に行われ、60名ほどの熱心な保護者の方が出席されています。
(宗教主任 清水 正)

女子短大 より

ランチタイム・コンサート

10月11日(火) 12:30～13:20
女子短期大学礼拝堂
演奏者 加藤千鶴氏(ヴォーカリスト)

ACEFセミナー(共催)

10月15日(土) 13:00～17:00(予定)
女子短期大学礼拝堂、L402教室 など
講師 池田守男氏(資生堂社長)

青山祭開会礼拝

10月29日(土) 9:30～ 女子短期大学礼拝堂

後期チャペル・コンサート

10月29日(土) 13:00～15:00
女子短期大学礼拝堂
出演団体:短大聖歌隊、短大ハンドベルクワイア、
ゴスペル 他

創立記念日礼拝

11月14日(月) 12:30～13:00
女子短期大学礼拝堂
お話 棚村恵子氏(兼任講師)
(宗教活動委員 松本 美鈴)

大学 より

スマトラ島沖地震・インド洋津波災害被災者支援 チャリティーコンサート

5月14日(土)、21日(土)

パイプオルガンとチェロ、ヴァイオリンの演奏
合計514,409円の献金が献げられました。

ランチタイム・コンサート

ハンドベル、パイプオルガンの演奏
青 山:5月26日(木)、6月24日(金)
相模原:4月25日(月)、5月27日(金)、
6月30日(木)

フィリピン里子訪問プログラム報告会

5月18日(水)、19日(木)
参加した学生による報告会

清里サマーカレッジ

8月1日(月)～3日(水)
講師 深井 智朗先生 大学八ヶ岳寮
「あなたは本当に自由ですか？」
—自由な社会の不自由な人間—
(宗教センター事務局 平野修一)

本部 より

おーる あおやま あーとてん '05

6月27日(月)～7月8日(金)
「新しい天地」短大ギャラリ-

アート フォーラム '05

7月1日(金)
講師 遠山 公一先生(慶応義塾大学)
「受胎告知図の今と昔」女子短期大学礼拝堂
(宗教センター事務局 平野修一)

宗教センター(青山キャンパス) 移転のお知らせ

青山キャンパス再開発計画にともない、宗教センター(青山キャンパス)は、東門近くのウェスレーホール内に移転いたしました。電話番号に変更はありません。間島記念館内の旧集会室は使用できませんので、ご注意ください。

編集後記

「伝えることの重み」をいろいろな場面、さまざまな意味で感じます。この夏、宗教センター事務局が「ウェスレーホール」に移って元のさやに収まったかのようにですが、これは「新館」建設中の仮越して、宗教センターの機能には種々の制約が生じています。新しいウェスレーホールの建設が青山キャンパス再開発事業の中で実現することを願うと共に、建物だけでなく組織・機能も「青山学院宗教センター」にふさわしいものにしていく努力が必要でしょう。最後になりましたが、ご寄稿いただいた皆様に深く感謝いたします。(黒沼 健)

Wesley Hall News 第85号

発行 青山学院宗教センター 宗教部長 東方敬信
東京都渋谷区渋谷4-4-25
TEL.03-3409-6537(ダイヤルイン)
URL.http://www.aoyamagakuin.jp/rcenter/index.html
E-mail.agcac@jm.aoyama.ac.jp
編集 ウェスレー・ホール・ニュース編集委員会
印刷 万全社